

3 . もう一つの戦後ドイツ・スポーツの成立史

上野 卓郎

1 「もう一つの」の意味

表記の「もう一つの」は二重の意味で課題意識を示すものである。第一に、戦後ドイツ・スポーツ成立史は西ドイツ偏重ではないかという批判的認識があり、一方で、今日の西ドイツでも新たな史的検討の展開が見られるという研究状況認識がある。第二に、もう一つのドイツとしての東ドイツ = DDR のスポーツ史についての科学的・批判的分析の資料的基礎が整ってきたことから、改めて戦後ドイツ・スポーツを東ドイツから見直す必要性が生じているという課題の必然性がある。ここでは、この第二の意味に重点を置いて関連研究の最新の成果を示そうと思う。

2 関連研究の最新の成果 = タイヒラー 2006 年論文

タイヒラーは 2006 年の共編著において注目すべき論稿を提出した。それは、戦後ドイツの東部地区 = ソビエト占領地区 (SBZ) から DDR となる地区の支配政党 = 社会主義統一党 (SED) のスポーツ政策を上記 SAPMO 資料に基づいて実証的に論じたものである。Sport unter Führung der Partei - Die frühen sportpolitischen Weichenstellungen der SED . (党の指導の下のスポーツ SED の初期スポーツ政策的転轍) がその論文タイトルであり、所収共編著は、Jutta Braun, H.J.Teichler (Hg.), Sportstadt Berlin im Kalten Krieg. Prestigekämpfe und Systemwettstreit. Ch.Links Verlag, Berlin 2006. S.20-65. (ユッタ・ブラウン、タイヒラー編 『冷戦におけるスポーツ都市ベルリン 威信闘争とシステム競争』 Ch.リンクス出版、ベルリン、2006 年) である。

その「前文」で、1957 年のドイツ体操・スポー

ツ同盟 (DTSB) 創立までの SBZ と DDR のスポーツの、資料に支えられた科学的・批判的叙述が相変わらず存在しないこと、そのため SED のスポーツ政策的転轍についての全般的考察がなされねばならないことが強調される。以下、小見出しでの論文構成を見る。1. 戦後直後の連合国の影響。2. SED の最初のスポーツ活動。3. FDJ (自由ドイツ青年同盟) のスポーツ的野心。4. 「スポーツは我々に対立する」 人民スポーツ運動か、FDJ と FDGB (自由ドイツ労働組合同盟) の担い手におけるスポーツか。5. 「大きな贈り物」 FDJ への SMAD (在独ソ連軍政本部) の申し出。6. 自立的人民スポーツ運動に対立する 1948 年 6 月 1 日の SED 決定。7. 1948 - 1951 年 : 党スポーツの「人民民主主義的」バリエーション。8. 新しいスポーツ・モデルか、古いスポーツ・モデルか 独裁比較についての必要な中間考察。9. 1951 - 1952 年 : 国家スポーツへの途上で。10. ウルブリヒトの直接指揮下のスポーツ。11. 1952 - 1956 年 : 「この混乱はアナキーと敵対勢力に戸を開く」 ソビエトの手本に従った国家スポーツの失敗。12. 改革プロジェクト「ドイツ体操・スポーツ同盟」。13. 「社会主義大衆組織」としての DTSB。

ここでは、1 から 6 まで、すなわち、1949 年 10 月 7 日の DDR 建国以前の時期に限定して要約する。

コミューナル・スポーツとフェライン・スポーツの対立

戦後直後について、「多く引用されるが、しばしば誤って解釈される」1945 年 12 月 17 日の連合国管理委員会指令第 23 号がその時々々の占領地区命令権者に活動の余地を残したこと、それは確かに国民社会主義身体運動帝国同盟 (NSRL) のフェラインの禁止を繰り返したけれども、市民的・非軍事的スポーツ種目に制限し、地区(クライス)

境界までのローカルレベルでのみ行動するかぎりフェラインの新設を禁止しなかったこと、ソビエトのイニシアティブで成立した指令が東ベルリンと SBZ では全般的フェライン禁止として解釈され公布されたのは、コミユナル・スポーツの一義的な鼻祖とフェライン原理の厳格な拒否に根ざしたものであったことが、確認される。ゲルハルト・カイダーリンクによれば、「統一党、ブロック形成、大衆組織の KPD 構想には、かつてのスポーツ構造の再生に、すなわち、ブルジョア・フェラインにも独立の労働者スポーツにも、いかなる余地もなかった。むしろ考えられたのは<かつての労働者スポーツと人民スポーツのジンテーゼ>としての共産主義的に統制された統一組織であった。そのときが来るまではコミユナル・スポーツが合目的的な移行形態として現われた。」それを超えてコミユナル・スポーツが、共産主義的に支配される都市行政にスポーツの恒常的な管理と操縦を可能にし、KPD の影響を確実にするのを助け、ナチスの負荷を遮断するはずだったのに、その希望は果たされなかった。

SPD と KPD の SED への「強制」合同（1946 年 4 月 7 日）直前のホーネッカー（FDJ 議長に任命されたばかり）の、フランツ・ダーレム（組織問題担当 KPD・ZK 書記）宛の書簡は興味深い。「異なる [西の] 占領当局によって励まされてますますフェラインの許可への要求が前面に出ている。ブルジョア・スポーツマンはこの合言葉の下に活動しているので、彼らはスポーツをする者の目に自由な人民スポーツの代表として現われる。そういうわけでベルリンではスポーツ局の我々の同志が自立したスポーツ運動の敵と見られるという奇妙な状態が現われている。一方で、フェラインへの要求を挙げ、この問題に関心ある者との話し合いや協議会を開催するブルジョア・スポーツの支持者によって、他方で、離れたところ立ってフィヒテ・スポーツ連盟あるいは労働者体操・スポーツ連盟 [ママ！] の再建への要求を挙げる労働者スポーツの支持者によって。」それ故、かつての労働者スポーツマンをコミユナル・スポーツ

に繋ぎとめ、そうして「一つの大きなドイツ人民スポーツ連盟のための基礎」を作ることが要求されるとする。「この状態と、スポーツが我々の人民の大部分を魅了するという事実を鑑み、スポーツ運動における我々の影響を固めるための措置がとられることが必要である。」

新しく創立された SED はスポーツにおいて差し当たり SPD の立場を引き受け、占領当局が許すや否やフェライン・ベースでの統一的な人民スポーツ運動が作られるべきだということで意見が一致した。スポーツは「党に結びつかずに、自由に民主的に発展する」べきだとした。SED 中央書記局の中央文化委員会でかつての SPD 党員が人民スポーツ連盟のための規約草案に従事したのに対して、かつての KPD 党員はコミュンにおけるスポーツ管理に集中した。ホーネッカーがダーレム宛書簡の追伸で「ソビエト地区では FDJ によって、すなわち、フェライン的に、青少年スポーツが受け入れられた」ことを知らせ、この書簡にダーレムが「スポーツ運動はどうすれば最も合目的的に構築されるかという再質問」とメモしたことは、スポーツの新しい組織形態が問題であったことを示す。しかし、ソビエト軍事管理部 (SMAD) は、ソビエトでは自由なフェライン・スポーツを知らなかったが故に、コミユナル・スポーツに固執した。とはいえ、この「暫定的解決」(コミユナル・スポーツ)は成功しなかった。結局、SED 指導グレミアムと SMAD によるスポーツ問題の引き延ばし策が生じ、1948 年 11 月の「民主的スポーツ運動」の構築の状態に関する秘密報告で「SED の前に立つ沢山の問題と課題のためにこの問題はいかなる考慮も払われなかった」とされた。

1946 - 47 年の時期のスポーツ問題の明白な過小評価に対する最も強い証拠は、相応の委員会 (SED のスポーツ・身体文化委員会や国民教育ドイツ中央行政付属人民スポーツ担当者) を社会民主主義者によって指揮させ、他方、権力政治的に決定的な立場 (人事、警察など) は常に共産主義者によって占められたという事実である。

人民スポーツ運動とFDJ問題

1947年1月27日の「ソビエト地区スポーツ・身体文化協議会」が改めてドラマティックな像を示す。その協議会文書は言う。「ソビエト地区の諸州におけるスポーツの構築と操縦は誠に様々だ。ブルジョア勢力は全ての州でスポーツの指導を自らの手に入れる意図をもって突き進んでいる。かつての労働者スポーツ運動からの勢力は冷遇されていると感じ、高まる不満が蔓延している。この事態は職場スポーツ組織、反ファシズム・ワンダーグループなどのような不規則なスポーツ組織の形成に導いている。ロシア人司令官の指令によってスポーツが民主主義文化同盟の手に置かれている地域もある。軍事的・ファッショ的勢力がスポーツ運動に忍び込むことも認めるべきだ。討論は、創立されるべき人民スポーツに関する統一的把握が党においてまだ存在しないことを示した。チューリングンの代表は、自由ドイツ青年のスポーツ団(SG)が人民スポーツに協同して加わるという説に、異議を唱えた。彼らは彼らの見解を次の言葉で総括した「スポーツはスポーツ組織に、青年運動は自由ドイツ青年に。」。FDJ問題での党指導部(組織部門で代表される)と基底(チューリングン)の間の見解の相違に面して最小限の妥協で一致した。すなわち、少なくとも固有の新聞の創刊によってブルジョア的なものを未然に防ぐことであり、これが1947年4月25日、このきっかけから初めてスポーツ・テーマに従事したSED中央書記局で確認され、その10日後「ドイチェ・スポーツ・エコー」第1号が党による創刊と気づかれないように発行された。これが最初の中央のスポーツ政策的決定であった。

西占領地区と西ベルリンでのフェライン創立の波に面して、SEDが新しい人民スポーツ運動における指導要求を満たすことに疑いを持ったソビエト軍管理部の制御手機能によって、SEDにおける1947年はコミュナル・スポーツとFDJスポーツの競合によって規定された。1948年2月16日、SED中央書記局が、党教育部、文化・教育部とベルリン州連盟にSMADと連合司令官へのベル

リンと占領地区でのスポーツフェラインの形成への申請を中央書記局の次の会議のために準備することを委託。SMADとの交渉の指導を委任されたのが、有名な論文「社会主義への特殊ドイツ的道はあるか」の著者、ZS書記アントン・アッカーマンで、彼は交渉の結果、3月5日に「中央書記局でこの案件における原理的決定を下す」との提案をする。選択が明確に持ち出された。すなわち、「これまで我々が意図しているように人民スポーツ運動を発展させるべきか、あるいはスポーツの把握をFDGBとFDJ(ママ!)に任せるか、についての決定が問題だ」と。ウィルヘルム・ピークは文書のこの部分を濃い青色鉛筆でマーキングし、二つの選択の帰結を文書の頭に「スポーツマンは我々に対立する」とメモした。スポーツマンの多数がフェライン原理に愛着を持ったかぎり、このピークの帰結メモは正しかった。しかし、SEDにもFDJスポーツの反対者がいた。かつての労働者スポーツマンと以前のSPD党員の多数がフェライン基盤での人民スポーツ運動のほうに他の全てのバリエーションより好意を持っていた。

1948年3月22日、中央書記局に「ソビエト占領地区でのドイツ人民スポーツ連盟の認可への申請」が提出された(3月草案)。それは、地域的フェラインの基盤の上に、州スポーツ連盟から、「以前存在したブルジョア、労働者、宗派のスポーツフェラインへの分離」を克服する統一的スポーツ組織を構築するはずであった。国家装置の青少年組織におけるスポーツ、それはたしかに先行の独裁の、スポーツマンに最も人気のない組織原理であった。スポーツ共同体とFDJスポーツグループの間の協働あるいは境界付けがどのように行われるべきかは未解決のままであった。SED指導部は「ドイツ人民スポーツ連盟」にどの程度独立性を認めようと思ったのか。スポーツ専門活動はどのように組織されるべきか。国際スポーツ交流のもっと後の再採用にとって不可欠の前提だった専門連盟への言明は完全に欠落していた。これは、一方で、ドイツ・スポーツの国際的孤立と、なお存在する占領権力の制限的付帯条件から説明される

が、しかし、1950年12月10日のドイツ・スポーツ同盟の創立まで催された西側占領地区での専門連盟原理をめぐる公開討論を目的にすれば、人目を惹くものである。したがって、SBZとベルリンでのこの種のスポーツとは離れた議論は、スポーツ組織の問題が明らかに特に専門に通じていないSED役員（ウルブリヒト、ホーネッカー）の小グループとSMADとの間で政治的優位に従って決定されるか、あるいは1948年3月のように改めて延期されたことをもってのみ説明される。2日後の党幹部会の前での中央書記局の活動に関する報告では、たしかにモスクワのスポーツパレードにスポーツ代表団をもって参加する決議が言及されたけれども、「人民スポーツ運動」の焦眉の問題が多数の未解決問題のために改めて延期されたことは隠しておかれたままだった。

4月になると、SMADによるFDJスポーツに対する規定、「スポーツは地区（クライス）規模でのみ実施され得る」を、「大きな贈り物」として利用する動きがウルブリヒトを中心に強まり、SED内部で、とりわけラインハルト・ヘルヴィクによって発展させられた「フェライン基盤」での人民スポーツ構想は突然放棄された。1948年4月26日、中央書記局は青年書記局の議長の下で改めて「スポーツ問題に関する決議」仕上げのための委員会設置を決定し、それにウルブリヒトが唯一の中央書記局員として加わる。目を惹くのは、この会議の議事日程にも決議文面にも、独立のフェラインが組織化されるスポーツを保証するこれまで支配的な概念「人民スポーツ運動」が現われなかったことである。これと平行してFDJでのスポーツ職務創設が決議され、FDJの2つのスポーツ学校設立認可が与えられ、州政府はFDJのスポーツ器具、スポーツ場準備を要請された。こうして4月26日の中央書記局決議でスポーツの新しい組織形態（FDJ/FDGS）のための仮決定が下された。1948年5月12日の党幹部会会議での成人スポーツ把握をめぐる議論で多数派が（ピークも）FDJのスポーツ独占に反対であることが示された。そのさい「労働組合を通じてのスポーツ活動」

組織化の可能性が示される。結局、独立のスポーツ連盟の創立は妨げられた。コミュナル・スポーツの屋根の下にあるスポーツ共同体（フェラインは禁止）は、今やFDJと大衆組織（FDGB、DFD（ドイツ民主婦人同盟）VdgB（農民相互援助会））のスポーツ委員会によって枠付けられ、さらに内務省の統制に服されることになった。

残りの要約は後日に期したい。